

# がん社会 を診る

中川 恵一

健康食品やサプリメントをはじめとした、がんの代替療法（民間療法）がいまだに幅をきかせています。8月には科学的根拠のないまま、がん治療などを目的に臍帯血（さいたいけつ）を無届けで投与していたとして、医師らが逮捕される事件がありました。患者は自由診療で1回300万〜400万円払っていたといいますが、効果は全く期待できません。

それどころか、ビタミンCなどの抗酸化物質は活性酸素を発生させ、がん細胞を攻撃する放射線治療や一部の化学療法の効果を阻害する可能性があります。また、ビタミンEをサプリメントとして取り過ぎると、前立腺がんのリスクが増す可能性も示されています。野菜に含まれるベータカロテンは、過剰に摂取すると肺がんの発症率が高くなること分かってきました。

## 根拠なき代替療法 逆効果も

2005年に発表された国内の実態調査によると、がん患者の44・6%が何らかの代替療法を利用していることが明らかにになりました。利用頻度の多い人の特徴は60歳以下の女性、過去に抗がん剤治療を受けたことのある人、現在ホスピスや緩和ケア病棟に入院している人でした。高学歴の人にも多いのも特徴です。これらは欧米で行われた実態調査の結果と同様でした。

具体的な使用内容は、健康食品（サプリメントを含む）が96・2%と圧倒的で、気功は3・8%、灸（きゅう）は3・7%、鍼（はり）は3・6%と少数派でした。

代替療法を利用する目的は「がんの進行の抑制」が67・1%、「がん治療」が44・5%、「症状の緩和」が27・1%、「通常医療の補完」が20・7%でした。一方、欧米の調査では「症状の緩和」や「通常医療の補完」が多く、使用内容も鍼や灸、マッサージ、心理療法など多岐にわたります。健康食品の利用頻度は日本ほど高くありません。

日本では、代替療法に対する月々の支払金額は平均5万7千円で、50万円かけた人もいました。代替療法のコストは、40兆円超の国内医療費の1割に上るといいうデータもあります。

代替医療のきっかけは「家族や友人からの勧め」が77・7%で、「自らの意思で」の23・3%を大きく上回ります。ありがた迷惑にならないように気をつけたいものです。

（東京大学病院准教授）



イラスト・中村 久美